子どもと社会の豊かな関係性を拓きゆくために

―― ヒューマンルネッサンス研究の使命 ――

株式会社ヒューマンルネッサンス研究所　社会研究部部長　**中間 真一**

はじめに

ヒューマンルネッサンス研究所（以下、HRI）は、電機メーカーのオムロングループの未来社会・生活研究所です。なぜ、HRIが未来社会や生活研究を手がけ、なかでも子どもたちの育ちや学びの場の研究や実践に取り組んでいるのかを、まず簡単に説明します。

それは、「企業は社会の公器である」というオムロンの企業理念に基づいています。そして、常に一歩先の社会を展望し、新たな社会に必要とされるものを探り当て創り出し、社会への貢献を果たそうという企業姿勢を背景としています。そして、1970年にオムロン創業者がまとめた「SINIC理論」は、科学・技術・社会の連関を人類史をたどり未来予測へと展開したものですが、HRIの未来研究はこの未来社会シナリオに基づいて展開しています。

この中では、21世紀初頭を、20世紀型工業社会からの大きなパラダイムシフトの時期と位置づけており、人間らしさを重視した「自律社会」に向けた変化の時代と表しています。この社会を描き出し、明るい未来への兆しを見つけ、自らもその創出の一端を担っていこうとするのがHRIの使命なのです。そこで、「自律社会」の中核世代となる、現在の子どもたちが生きていこうとする未来を、希望に満ちたものであるようにデザインし、築いていく努力をすることは、企業にとっても大きな社会的責任であると考えています。

イタリアと日本の子どもの写真の比較

このような目的のもとに進めているHRIの子ども研究のスタートは、「日本の子どもたちの今」がどのような特徴を持ったものなのかを確かめようとした、約10年前に実施した写真投影法による国内外での調査でした。

この調査は、9?10歳の子どもたちに使い捨てのカメラを渡し、約2週間の期間内に「好きなもの」を撮影して、撮影メモと共に提出してもらい、一部インタビューも行うというものです。

その中で、最も特徴的だったのがイタリアと日本の子どもたちの被写体の差でした。イタリア中部の都市ペルージャで実施した約100名の子どもたちが寄せてくれた写真は、見事なまでに最初の数ショットが自宅での両親や家族を被写体としたものでした。次に自分の部屋、学校や近所の友人たち、街の中から郊外ののどかな風景へと24枚のコマを使い切ってシフトしていくのがよくわかります。すなわち、「好きなもの」と問われて、最も身近で信頼できる場や人から始まり、次第に世界を拡げていくという自然な展開が明らかに表現されていたのです。

これに対して日本の子どもたちの写真は対照的なものでした。最大の違いは「人間」が撮影されていないということです。ずらりと床の上にスナック菓子を10個以上並べて撮影した写真、テレビゲームの映像、アイドルのポスターなども多く見られました。そして、人間が撮影されていたかと思うと、家族旅行の写真プリントや学校の遠足の写真を撮影した写真というありさまで、閉じ込んでいく世界なのです。

子どもたちの未来は、明るく広がっていくものであってほしい。このような私たちの願いや期待とは、かなり異なった子どもたちの生活世界の現状を確認し、その問題の大きさと大人社会による影響を痛感したのです。そして、もはや第三者的な調査ではなく、可能な限り現場感覚に基づいた調査研究を進める必要を感じました。失われつつある「子どもたちが、社会的な生き物である人間として、自然に育っていける学びや遊びの場」を、小さな取り組みながら実験的に展開を通して進める研究スタイルをとることにしました。これこそ、工業化社会の中で進められてきた「人工化」、情報化社会の中の「情報洪水」、都市化社会の中の個人の「アトム化」、このような20世紀社会の問題解決であり、21世紀社会の芽づくりであると考えたわけです。

場のルネッサンス

そして、この調査結果に対して、私たちの問題意識を共有し得る方々との出会いや議論の中から、ある幼稚園開園を支援し、子どもたちの社会へのスタートポイントとなる場から、現状把握と改善を進める足がかりをつかみました。

この「風の谷幼稚園（川崎市）」は、宅地開発が進行中の多摩ニュータウン外縁部に位置し、まだ自然環境も良好な場所にあります。この開園から今日に至るまで、財政面以外の支援を、子ども研究の立場から行ってきたわけです。私は、この園の特徴を「子どもの育ちにとって、当たり前の場のルネッサンス」と表現しています。そして、人生のスタートポイントとなる幼稚園で、自律した生き方のできる人間に成長していくためのコアを、心と身体の中に築いてほしいという願いのもとに保育活動が進められています。

この園には4つの基本があります。①体ごと遊ぶ　②手を使う　③いっぱい歩く　④親も一緒に。どれも難解な教育理念や手法ではなく、子どもにとって当たり前のことばかりです。しかし、今これらの4項目は、子どもたちの生活世界の中で、かなり得難いものになっていないでしょうか。もちろん、科学、技術、社会、それぞれに高度化し、複雑化し、国際化した現代ならではの事情もあるでしょう。そして、過去に逃避するわけにもいきません。だからこそ、自律した個人として社会に生きる力を、今まで以上に育ま

なくては幸せな未来は築けないのではないでしょうか。そのためには、前述の4項目は、とてもわかりやすい子どもたちの育ちの場の要件だと確信しています。

たとえば、保育活動の中でジャガイモ掘りがあります。一般的には、自分にあてがわれた区画内で掘り出して持って帰ることが多いでしょう。しかし、風の谷幼稚園のジャガイモ掘りは、いくら掘ってもかまいません。しかし、10～15分の山道をリュックを担いで自力で持ち帰らなくてはいけないのです。自分の力と挑戦の気持ち、周囲への配慮などが必要なのです。初めての頃は、途中で担ぎきれなくなってしまう子もいれば、たった1個しか持ち帰らない子もいました。3年間を通したイモ掘りが、子どもたちの成長への学びの場となっているのが一目瞭然です。

さらに、幼稚園開園と同時に、私たちは小・中学生を対象とした「てら子屋」(江戸の寺子屋の価値と、地球の子どもたちの学び舎という意味を重ねた）というワークショップを始めました。なぜなら、断絶することなくのびのびと連続して、一人ひとりの子どもが自分の関心をもとに、世界を広げていける学びの場の可能性を考えたからです。年4回程度の開催が精一杯ですが、子どもたちの成長プロセスと、好奇心の広がり、それを阻害する現代社会の要因が明らかに観察できます。

「てら子屋」では「自然」「科学・技術」「アート」が渾然一体となったプログラムを独自に編成し、子どもたちが本物の大人たちや本物にふれることにより、好奇心を広げていける学びの場づくりを志向し、試行錯誤を重ねてきました。これは「野性」、「知性」、「感性」のバランスと融合の場と言い換えることもできます。そして、特に現代の子どもたちに欠けているのが「野性」であることがわかってきました。自立して生きる力という観点です。

そこで、サバイバルキャンプのようなプログラムも実施しました。山奥の電気もガスも水道も電話も通らない木こり小屋を借りて、約30名の子どもたちが5日間を過ごします。到着当初はうれしくて大騒ぎ、しかしすぐに「次は何して遊べばいいの？」と指示を求めてくる。それでも放っておくと、そこここに遊びのかたまりが生成し始め、それらの結合と分離が繰り返される。そこには、彼らの自然な社会づくりへの問題解決とコミュニケーションがうかがわれます。

また、ナイトハイクでは毎回子どもたちの素晴らしい感性と表情に接します。月明かりも無い漆黒の森の中、子どもたちのセンサーは研ぎ澄まされます。「あっ、クマの足音だ」、「シカの足」、「オオカミが吠えている」、子どもたちの想像力が全開になるのです。そのあとで、みんなを集めてロウソク1本をともした時の明るさと、子どもたちの安堵の表情は何ものにも代え難いものです。

もちろん、このような山奥のキャンプでも、水の流れや水生昆虫、生態系など科学的プログラムや創作活動も編み込みます。また、「音」をテーマにプロの演奏家を招き、音のしくみと音楽を楽しむことを重ねたり、宇宙飛行士を招いたり、様々なトライアルを重ねてきました。そして、これらの場からわかったことは、子どもたちが本物に接した時、心身すべてで感じ取った時、そこに生まれた内なる動機が自らの学びを広げていく力は、大人たちが学力低下を憂う半端な議論を超越した大きさであるということでした。

「子ども学」への期待

私たちは、子どもたちの自然な育ちの現場から立ち上がり、より実践的な場面を通じた提案により、未来への兆しとなる現場づくりにつながる「子ども学」に期待し、その一端を担えればと思っています。

「自律力」「創造力」の求められる社会へと、大きなパラダイムシフトが進む現在、子どもたちの力を開花させ得る育ちと学びの場づくりは、従来の教育観のままでは不都合となることも出てくるでしょう。現在、スウェーデンの研究機関と進めている「学校の未来」という調査プロジェクトからも、学びの場の改善方向が見えつつあります。学校と家庭と教育研究者のみならず、専門施設や企業、地域社会とのリンケージも重要となるでしょう。その中で、子どもたちが、開かれた未来を確かに信じられてこそ、学びと育ちも膨らむのだと考えます。